

# **Side Stage**

## Side Stage

「聞いたか？」

「アラムートの城塞戦のことだろうか？」

カノープスは頷いた。サラディンはとつくに休んでいる。本当ならばランスロットも休むはずだったが、昼間に聞いた噂が二人とも気になっていたので。

解放軍がジェミニ兄弟を倒し、アラムートの城塞を落としたという話は大陸の東の端にまで届いていた。だがそれには、西へ進むにつれ、解放軍がいかに苦戦したかという噂も加わりつつあった。

しかし、いまの三人の目的は一刻も早くその解放軍に合流し、グランディーナに聖剣ブリュンヒルドを渡すことにある。噂話をいちいち確認しているような時間はない。余計にランスロットもカノープスも気になってしまうのだ。

サラディンも当然、話は聞いているだろう。その養子であるグランディーナの身も案じていよう。けれど、彼が何も言わないのは言ったところでアラムート

の城塞戦はすでに終わってしまったものであり、意味がないことを知っているせいかもしれない。

「戻った方がいいが、解放軍がぼろぼろで動けねえなんて言ったら、しやれにならねえな」

「我々が本隊に合流できるのは何日か先だ。最後の戦いが終わってから六日も経っている。それほど悪い事態ではなくなっているだろう。マチルダたちもいるんだ」

「だけど、俺はこんな噂も聞いたぞ。解放軍のリーダーは利き腕の動かぬ身でありながら、率先して皆の先頭に立った、なんてな」

「それはわたしも聞いた。だが、みんなの士気を鼓舞するためには彼女ならばやりかねない」

「鼓舞するぐらいならいいけどな。あいつの場合、先頭に立って剣を振るってないとは言いい切れないぜ？」

「そうなんだな」

ランスロットが案じているのもそこなのだ。

「なんで誰も止めねえんだ？ 怪我だって治つてないだろうにウォーレンもアッシュも何やってるんだ」

「残念だが、わたしたちのいない解放軍に彼女を止められる人物がいたとは思えないな」

「わたしたちがいなくて、おまえ、止める自信があるのか？」

「止められるかどうかはともかく、止めようとはするさ」

「お小言を言える奴もいないとくらあ。まあ、この話の続きは明日にしようぜ。アラムートの城塞に近づけばもつと詳しいこともわからあな」

「確かに、情報不足でみんなを案じていてもしようがない」

翌金竜の月十四日には三人はヤースージ平野の北端、ラリベルタードに入ることができた。だが、ここでランスロットとカノープスが耳にしたのは、いままでとさほど変わらないが、より確かな情報であった。

すなわち、解放軍は多数の負傷者を出し、リーダーも手負いのまま皆の先頭に立った。帝国軍との戦いは解放軍がアラムートの城塞に近づくにつれて激しいものとなつていったが、最終的に勝つたのは解放軍だったというものだ。

「サラデイン、あんたはどう考える？」

「解放軍にとつてかなり厳しい戦いになつたことは間違いない。だが、実際に会つて皆に確かめるまでわたしのできることはない。そなたたちの逸る気持ちは

わからぬでもないが、ここまできてグリフオンに無理はさせられまい」

そう言つたきり、サラデインは口を閉ざす。彼が興奮したり口調を荒げるようなことはランスロットもカノープスも滅多に見たことがなかつた。

「サラデイン殿はいつも冷静だな」

「俺がはしゃいでいるとでも言いたいのか？」

「そうじゃない。君をはしゃいでいると言うのなら、わたしも同じだ。なにしろ、本隊に合流するのは一月ぶりだからな。みんなの様子が気にもなるし、懐かしさも募るさ」

「ちえつ、そう言うおまえこそ冷静じゃねえの」

「はははつ、グランディーナに鍛えられたんだろう。多少のことでは動じなくなつたような気がする」

「そいつはおつかないねえ」

翌日、三人はミナチトランに至つた。

だが、そのロシユフオル教会に軽い気持ちで見舞いに立ち寄つたランスロットとカノープスは、思わぬ数の負傷者に驚き、解放軍から出向してきた司祭フランソワ・シャルンホルストからようやく事の真相を聞くことができた。

「グランディーナさまはテグシガルパでの戦いの前に、マチルダさまに動かない腕を包帯で身体に固定させるように命じられました。グランディーナさまが前線に立たれたのはそれからです。ですが、アラムート  
の城塞での戦いには、限られた方しか行かれていませんので、詳しいことは存じません」

「ありがとう、フランソワ。ところで君たちはいつからミナチトランに？」

「金竜の月六日からですわ。負傷者が多くてロシユフォル教会の方々にばかり負担をかけるわけにはまいりませんから」

「それではわたしたちは先へ進むことにするよ。君たちを手伝えなくてすまない」

「とんでもありません。ランスロットさまたちもどうかお気をつけて」

フランソワと一緒に働いている司祭のヴェルアーノープと僧侶のオハラードスクルメビュー、マーゴールティールケ、それにロシユフォル教会にもともといたエリーヌスイングらの見送りを受けて、ランスロットたちはロシユフォル教会を離れた。

「まったく呆れた奴だな。利き腕が動かないならどうしておとなしく引っ込んでねえんだ？」

「彼女が引っ込んでいられるような状況ではなくなっただろう。ミナチトランを落とすのに二日もかかっているし、ロシユフォル教会にも負傷者がいる。彼女の性格を考えても前線に立とうとするさ」

「それを止められる奴もいないだろうしな」

「だが、わたしたちや、何よりサラディン殿が合流していたら状況は変わっていたんじゃないか？」

「言うなよ。実際には俺たちはカストラート海に行っちまった。あの剣、ブリュンヒルドとかいったっけな、あれがどれほどご大層な代物だか知らねえが、サラディンはそいつを優先したし、グランディーナも俺たちが戻るまで待つていなかった。それが現実さ。あとは、あの剣が今回のことで失ったものを取り戻すに足りるのを願うしかねえんだ」

その聖剣は船を下りてからサラディンがずっと持っている。妖術師である彼は剣を使うことができないが、ランスロットなりに預ける気はさらさらないようだ。だが、彼が一度とて剣を抜いているのはランスロットもカノープスも見ることがない。

その日のうちにテグシガルパに至り、ランスロットもカノープスも足は自然とロシユフォル教会に向いた。そこには司祭のコーネリアールカルノー、フローネール

ンボルル、僧侶のグロリアⅡハシユマツト、ドミニクⅡハーンが負傷者の手当に専念していた。

彼女たちはランスロットらの帰還を歓迎したが、いまだに余談を許さぬ者もいて、疲労が溜まっているようだった。幸いなのはロシユフォル教会がどこも解放軍に好意的で、助けの手があるということだ。大神官フオーリスの遺志はこんなところにも届いているのだった。

「そう言えば、グランディーナは彼らを見舞いに来たのかい？」

「いいえ。来ていただければ皆さんの励みにもなると思うのですが、アラムートの城塞では傷を負われたとも聞いていますので、無理は言えませぬわ」

「それではランスロットさま、私たちは仕事に戻ります」

「ああ」

カノープスが先に教会を出、ランスロットは遅れた。だが、バルタンは彼を待つており、二人は夕闇の迫るテグシガルパの町を、サラディンとの合流地点を目指して急いだ。

「もう本隊を離れるのはお断りだな」

「わたしも同感だ。本隊と言うより、グランディー

ナの側をだ。少なくとも、彼女の利き腕が動くようになるまで、二度と離れるつもりはない」

「だけど俺たち二人でくつついてなくたっていいだろう？」

「そうだな。君かわたしが一緒にいれば、今回のような無茶は、もう少し避けられたんじゃないかと思うんだ」

「避けられたかどうかは俺には異論があるが、あいつに小言を言える奴がいなのは問題だと思うぜ」

「ウォーレンはディアスポラで一度やりこめられているからな。彼はもともと論争を避けたところがあつるし」

「魔術師なのに論争が嫌いなのか？」

「すべての魔術師が論争好きとは限らないだろう。ウォーレンは誰とも喧嘩しない」

「へえ。一度、ふっかけてみようかな」

「それぐらいじゃ彼は乗つてこない。それに、喧嘩はしないがウォーレンは頑固だ。ずいぶん彼とはやりあつた」

「ああ、おまえたちはそういう関係だったな」

「いまとなつては懐かしい話さ。わたしの方が若造だったのにウォーレンがつき合つてくれたんだ」

「はははつ、そいつは損な性分だねえ。きつといまごろ、くしゃみでもしてるだろうよ」

二人が宿に戻ると、サラデインは相変わらず難しい表情で考え事の真つ最中のようだ。

「遅くなりました。食事に参りませんか？」

「その前にロシユフォル教会で見聞きしたことを教えてくれぬか」

「承知しました」

ランスロットが怪我人のことや解放軍から出向しているという司祭たちについて話すのを、サラデインは黙って聞いていた。

「大変な戦ではあったが、最悪の事態というわけでもないのだな」

「一時的とはいえ、三〇人も抜けてるのにか」

「そうだ。解放軍に志願する者も増えている。帝国に比べれば微々たる存在とはいえ、人びとの解放軍を見る眼が変わってきている」

「しかし無理な戦でした。グランデイナーはなぜ、サラデイン殿のお帰りを待たなかったのでしょうか？」

「遅れると言つてもたかが九日のことです」

「そなたならば待つと言うのか？」

「待った方が良くもありません。もちろん、

帝国の動向がわからない状態で判断するのは早計というものでしょうが」

「ならば何も言わぬことだ。そしてわたしもそなたも責任を担う立場にはない。不用意なことは言わぬ方が良い」

「申し訳ありません」

「俺はその考え方には反対だな。責任がないからつても何も言えなくなつちまつたら解放軍は息苦しくてたまらねえぜ。そうでなくてもあいつにものを言える奴が少ないんだ、この上、ランスロットまで黙らせられるか」

「なるほど。わたしの知らぬ事情もあるのだな」

カノープスは大きく頷いた。

「あんたのことだ、本隊に合流すれば、もつと色んなことがわかるんだろうけど、俺たちも伊達にあいつと四ヶ月も戦つてきてねえ。そこら辺の事情は汲んでもらいたいな」

「承知した」

「お帰りなさい、サラデイン」

金竜の月十六日の昼ごろ、アラムートの城塞の屋上でグランデイナーはカストラート海から戻ってきたば

かりの三人を出迎えた。アッシュたちリーダーも一緒だ。彼女の利き腕は相変わらず吊られたままで、ランスロットとカノープスはあれから一ヶ月以上も経つたのにまだ動かぬことに驚く。手首の包帯も取れていない。骨が露出するほどの怪我だったのだから無理もなかるうが、いまだに裸足でいるのは予想外だ。

しかしサラデインは真つ先にブリュンヒルドを差し出した。

エレボスとシューメーはユーリアとカリナに連れられていった。

「この剣は？」

「地上と天界を繋ぐただ一つの鍵、聖剣ブリュンヒルドだ。この剣があれば、カオスゲートを開くことができる。天空の島に行つて天空の三騎士殿に会いなさい。解放軍にはその助力が必要だ」

グランデイナーは頷くと、ブリュンヒルドの鞘をくわえて無造作に剣を引き抜いた。

ランスロットが鞘を受け取ると彼女は剣を収め、また抜いた。

「サラデイン、あれがカオスゲートか？」

その言葉に皆が振り返った。海を挟んだ南の対岸に光の柱が天まで伸びている。それが消えて、ランス

ロットがグランデイナーを見ると、彼女は鞘に収めた聖剣をまた引き抜いた。振り返ると光の柱が再度、立ち上っていた。

「なぜカオスゲートだと思ふのだ？」

「三日前にあの辺りに似たような光の柱を見た者がいる。調査に行つたが軍隊の通つた跡が残っているだけでそれ以上の情報は得られなかった。カオスゲートを開くのにこの剣が必要なのであれば何の不思議もない。何の手がかりが得られなかったのも道理だ」

「わたしも実物を見たことはないが、おまえの話聞く限りではそうと考えていいだろう。だがそれはいい話ではないな。ブリュンヒルドでしか開くことのできないカオスゲートを開くほどの魔力の持ち主などほかに考えられぬ」

リーダーたちは思わぬ人物の出現にざわめいた。解放軍の目と鼻の先を通つていったとは誰も想像だにできなかったからだ。

「あのカオスゲートの行き先は？」

「それはわからぬ。天空の島は四つ知られているが、どのカオスゲートがどこに通じているのかまでは知られていない。行つた先で確かめるよりあるまい」

「ほかにカオスゲートがあるのはどこだ？」

「わたしが知っているのはガルビア半島とアンタリア大地だけだ。だがアンタリア大地は古来より封印の地と呼ばれ、ホーライ王国が滅亡するまで封印の儀式を行ってきたところだ。儀式そのものはホーライ王国の神官長が務めてきたが、最後の神官長となつたオミクロン殿がその地位を追われてから行われていないはず、何を封じてきたのかは代々の神官長しか知らぬことだが、天空の島々を封じることがあるまい」

「ガルビア半島に行くには八日ぐらいかかるし、アンタリア大地はもつと遠い。先にこちらのカオスゲートを調べよう。何日か前にユーリアが天空の島らしい影も見つけている」

「それも珍しいことではない。天空の島は動いている。その影を見て、人は想像を巡らしてきたものだ」

「だけど、今日一日、あなたたちは休んでくれ。カストラート海での話も聞かせてもらいたいし」

「そうさせてもらおう。そなたたちも働きづめで疲れたらう」

「わたしはそれほどありませんが」

「おまえは疲れてなくても俺は疲れてるんだよ。余計なことを言うな」

一行はグランディーナとサラデインを先頭に屋上か

ら降り、要塞内の会議室に入った。

「カストラート海の報告を聞かせてくれ」

サラデインは頷き、主にカノープスの方に向き直る。

「足りないところがあつたら、そなたたちが補足してくれ」

「承知」

そうは言つたものの、サラデインの話は無駄がなく、要点もぎつちり押さえている。ずつと一緒に行動していたランスロットには補足すべきことなどないどころか、彼の話に初めて気づいたこともあるような始末だ。単独で動いていたカノープスも、ほとんどのことをサラデインに話してしまつていたので、追加するところもないほどだった。

サラデインの話が始まつて間もなく、ミネアノツドとエオリアルクセジュがお茶を運んできた。彼が話を中断したのはその時だけで、あとはほとんど一人で話しきつた。

「それでは、そのアルコルという奴はアルピレオの転生ではないのだな？」

「本人の言つたとおり、ラシユディ殿の四番目の弟子と考えていいだろう」

「わかつた」



話し始めた時には高かった陽も、終わるころにはすっかり西に傾いていた。そちらは砂の海、広大なダームード砂漠だ。

グランディーナの視線が机上に置かれたブリュンヒルドに向けられた。彼女はほんの少し考えてから、それをアッシュの方に押し出した。

「これは、しばらくあなたが管理していてくれ」

しかし、アッシュはブリュンヒルドを即座にランスロットにまわした。

「わしには自分の剣がある。傷も治りきつておらぬし、聖剣はそなたに任せよう」

「承知しました」

自分でも意外なほどに落ち着いて、ランスロットはブリュンヒルドを受け取った。重くて、長い両手持ちの剣だ。

「明日はカオスゲートから天空の島に攻め込む。ラッシュデイが残っているとは思えないが、人選には注意してもらいたい。私は夕食後に確認に行く」

「承知した」

「今日はゆつくり休んでくれ」

それでグランディーナとサラディン以外の全員が席を立ち、順に部屋を出て行った。その最後に会議室を

出たランスロットが振り返ると、グランディーナとサラディンも出たところだったが、二人の足取りは皆とは反対の方に向いていた。

「が、ら、ではないと言ってトリストアン皇子に司令官室を譲ろうとしたのだが、結局、グランディーナ殿が使うことになったのだ」

彼の行動に気がついて、ギルバルドが解説する。そうと気づいたカノープスも立ち止まっていた。

「ジェミニ兄弟が使っていただけあってやたらに大きいらしいのだが、デネブがパンプキンヘッドを連れ込んだらちようどいい広さになったそうだ」

「いつからデネブまでリーダーになったんだよ？」

「アイーシャは遠慮するし、ほかに適当な人選もなかったのだな。パンプキンヘッドは女性陣に人気はあるが、おぬしのような反対意見はなかったぞ」

カノープスは軽く舌打ちしたが、口で言うほどにこだわっていないのがランスロットにもわかった。

「それにしてもいろいろと大変だったようだな」

「まったくき。あんなに人使いの荒い奴とは思わなかったからな。だけど、おもしろかったぜ」

「おぬしらしい。怪我は大丈夫なのか？」

「ああ、とつくに治ったよ」

「ギルバルド、我々が留守のあいだ、こちらはどうかだったんだ？ ミナチトランとテグシガルパでロシユフォル教会に寄ってきたが、肝心のアラムートの城塞での戦いは聞けなかつたんだ」

「そのことなのだが、おぬしたち、今日は疲れているか？」

「用事によりけりだな」

「さすがに戦闘や教練はお断りしたいがね」

「急な話だが魔獣部隊の者と馴染みの者たちにも声をかけておいた。おぬしたちが無事に帰ってきたのを祝って、一席設けたいと思うのだが、どうだ？」

「えらいっ！」

カノープスがギルバルドの背をしたたかほたいたので、彼はわずかに顔をしかめた。

「やっぱり親友は違うねえ。おまえなら、そう言うてくれると思つていたぜ」

バルタンはギルバルドの背中を叩き続けた。

「聞いてくれよ。〈何でも屋〉が船を貸してくれたんだが、これが上等なやつでよ、飯は美味いし乗つてる奴らも気が利いてるし、言うことなかつたんだけど、たつた一つだけ俺には許せないことがあつてねえ」

「酒が振る舞われなかつたとしても言うのだろう」

カノープスの手はますます勢いを増していき、ギルバルドのむき出しの背中はだんだん朱くなつてきたが、彼は止めようとしなない。

「そのとおりっ！ 一滴も出なかつたんだぜ。酒樽どころか酒瓶だつて乗せてないとおぬかしやがった。俺は開いた口がふさがらなかつたよ」

「そんなことで騒いだのは君ぐらいのものだ。サラ Dein 殿もわたしも気にもしなかつたぞ」

やつとカノープスの手が止まった。気の毒そうな視線を向けるランスロットに、ギルバルドは苦笑いである。

「これが黙つていられるか。今日は飲むぞっ！」

カノープスは拳を振り上げ、迎えに来たユーリアの歓待を受けている。しかし、その様子を見つめるギルバルドの表情はあまり明るくない。

「奴は何があつたのか？ あんなにはしやぐなんてらしくない」

「わたしも詳しいことは知らない。ただ、単独行動している時に人魚たちとかなり仲良くなつたようだ。ポルキュスのほかに殺された人魚もいる。彼にはかなり堪えたのだろう」

「そうか」

その夜は魔獣部隊の者を中心に、ランスロットとカノープスの帰還祝いの席が一階の食堂で設けられた。アレックⅡフローレンスやマチルダⅡエクスライン、かしまし三人娘にカシムⅡガデムやエマーソンⅡヨイスまで顔を出すなど多彩な顔ぶれが揃って、ランスロットは旧交を温めあつた。カシムもエマーソンも解放軍では古株だ。志願者の世話にウオーレンを補佐して毎日、忙しくしているという話だった。

さらに魔獣部隊は酒の強さでは解放軍でも指折りの猛者揃いときている。後から顔を出す者も大勢いたので、人数の割に賑やかな宴会になった。

しかし、二人が主賓扱いされたのは最初の乾杯まで、あとはそこかしこで勝手に飲み食いが始まり、人の輪ができるのも魔獣部隊ならではである。

カノープスは最初、カリナⅡストレイカーに誘われたものの、皆と馬鹿騒ぎをする気分になれず、杯を片手に舐めるように飲んでいた。

「なあに、ずいぶんいい男になつて帰つてきたじゃないの。お姉さん、惚れなおしちゃいそう」

「あいにくと俺はおまえと軽口をたたくような気分じゃないんだ。だいたい、どいつがおまえなんか呼んだんだよ？」

「ああら、御挨拶ね。失恋したところを慰めてあげようと思つたけど、そんなこと言うのなら、悲劇の主人公気取つてなさいよ」

「そいつはねえだろう、デネブ？」

引き止めたカノープスに魔女は嫣然と微笑んだ。

「ここはお酒臭くてかなわないわ。もつと風通しいいところに行きましょう」

「いいとも」

不思議なのは誰一人として二人が出ていったことに気づかなかつたことだ。もつとも、ギルバルドとユーリアはともかく、魔獣部隊の面々は元来が酒好きなので、酒を飲むの口実があればよく、主賓のことは忘れがちだし、宴席の設けられた理由を忘れてしまうことも少なくない。最後までカノープスが消えたことに気づかなかつた者、そもそもデネブがいたことにさえ気づいていなかった者も少なくなつたのである。

途中でグランディーナが顔を出し、ギルバルドやマチルダと隅の方で話した。

その姿を見かけたランスロットは、もう一ヶ月以上も彼女とともに解放軍内を見廻っていないことを思い出した。解放軍も大所帯になつたが、グランディーナは相変わらずだ。

「グランディーナ、まだ廻るところがあるのならつき合おう」

「あなたとカノープスの帰還祝いだろう。主賓が二人とも席を外してどうする」

「えっ？」

それで、初めてランズロットはカノープスの不在に気づいた。ついさつきまでデネブと話していると思つたのに彼が占めていた場所にはライアンが座つて、ロギンスハーチ相手にしゃべつていた。

「大丈夫だろう、わたしがいなくても。みんな、そんなことを気にしていたのは最初だけさ。それにここにいると始終、酒を勧められて断り切れない。ギルバルドやユーリアには申し訳ないが、君と一緒にならばいい口実だ。つき合わせてくれ」

「これから、アッシュたちのところに行くつもりだ。以前のようにいちいち皆の様子を見て廻るわけにはいかないが、来たければ来てもいい」

「ありがとう。ギルバルドに断つてくるよ」

しかし、彼もユーリアもそれほど残念そうな顔をしなかつたのはせめてもの幸いだ。宴席を設けたけれど、ランズロットもカノープスも解放軍に戻つてきたのだから、機会はいくらでもあるだろうというのがギルバ

ルドの言い分であつた。カノープスに隠れて目立たないが、彼も負けず劣らぬ酒豪なのだ。

「解放軍の資金はそんなに潤沢ではないだろう？」

「それがマラノ市参事会の方々が協力してくださつて、皆さんの悩みの種がかなり解消したんです」

ユーリアの言葉にギルバルドが頷いて続ける。

「おかげで大して残つているわけではないが、オブレイン家の財産も全て各地の復興に当てることができる。ありがたいことだ」

その言葉にユーリアが案ずるような眼差しを向けたが、ギルバルドは気づかぬ素振りだ。

「それではわたしは抜けさせてもらうよ」

二人は今度は揃つて頷いた。

「待たせてすまなかつたな」

「それほど急ぐわけじゃない」

廊下で待つていたグランディーナは、すぐに歩き出した。

「ここは城塞だが、大丈夫なのか？」

「地下にも牢獄はあつたが誰も入れられていなかった。ジェミニ兄弟は武人であつて、規則違反でもしな

い限り、牢獄は使わなかつたそうだ」

「あなたも心配性だな」

アッシュはケビン・ワールド、チェスター・モローとともに皆の教練に当たるはずだったが、ジェミニ兄弟の攻撃で重傷を負ったので観戦するだけだそうだ。

そう言われてみれば、元騎士団長は屋上で再会した時も軽装だった。しかし、同じように怪我を負って見学しているアレックに言わせると、アッシュは見ていただけの時の方がよほど口やかましいそうで、つい手を出してしまうのだという。それをチェスターが慌てて止めることも多いとか。

「誰が行くのか決まったか？」

「このような構成にしてみたが、どうだ？」

アッシュの差し出した紙にグランディーナは視線を走らせる。

「ケビンとチェスターが二人とも来るのでは都合が悪い。留守のあいだ、こちらの指揮をあなたに頼みたいが、別に動ける者が必要だ」

「それならばチェスター殿に行ってもらおう」

「あとはこのとおりでかまわない。皆には伝えてあるか？」

「全員には通達しておらぬ。明日発つのであるから、これから伝えねばなるまい」

「ほかの者はともかく、あなたにはそろそろ補佐をつけた方がいいな。希望があれば聞くが？」

「誰でもかまわぬのか？」

「当人が承知すれば」

「ケインに頼みたい」

「訊いてみよう」

グランディーナは部屋を出ると、右手に向かった。残りの者のところか、そうでなければ、いまの話を切り出しにトリスタン皇子のところに向かっているに違いない。

二人の後からアッシュも部屋を出て、廊下の端にある階段を下っていったようだった。

「後で城塞内の地図を渡す。一人で歩けぬようでは不便だろう」

「わたしたちが帰ってきたからには長居しないのだろうか？ それにわたしは君の側を離れるつもりはない。だいたい、なぜわたしが迷っていると思うんだ？」

「ほとんどの者がそうだからだ。自分の部屋と食堂、倉庫、城門、中庭には皆が行き来できるようなったが、それ以外の場所には不案内な者ばかりだ。それにあなたを司令官室に寝泊まりさせるわけにはいかない。部屋が別でそんなことは言えまい」

「それは、確かに君の言うとおりだな。だが、そう思っているのなら、そこら中に城塞の地図を貼り出して現在地を記してやれば良かったんじゃないか？」

「あなたは頭がいいのだな。私も含めて誰もそんなことは考えつかなかった」

「逆だよ。現に迷っているから案内図がそこら中に欲しいんだ。こんなに広くて帝国軍は不自由していなかったのかな？」

「どうだろうな。早速、ヨハンに頼んでおこう」

グランディーナは階段を下りていく。

「アッシュ殿は一人部屋ではなかったようだが、誰が同室なんだ？」

「ヨークレイフだ。またトリスタンの部屋に行っているのだろう」

「皇子の部屋は遠いのか？」

「アッシュと同じ階の反対側だ」

「あまりいい人選とは思えないな」

「同室を言い出したのはアッシュだ。ヨークレイフも断らなかつたし、ほかに組ませる適当な者も思いつかなかつた」

「一人部屋にしてしまえば良かったのに」

「アッシュに断る理由も思いつかなかつたからな」

やがて二人は倉庫に着いた。アラムートの城塞は地上四階、地下一階建てで、倉庫は台所を挟んで食堂と並んでいる。食堂からは相も変わらず喧嘩が聞こえてきた。

「ヨハンはいるか？」

「これはグランディーナ殿、ランスロット殿も一緒に緒でしたか」

「ええ。先ほどはご挨拶もせずに失礼しました。ヨハン殿はお元氣そうですね」

「はい、資金という問題が片づきましたので補給も順調です。それに最近はお食事にも恵まれているせいか、若い時よりも肌艶が出てきたぐらいですよ。」

しかしサラディン殿がお戻りになつたというのにまだお話しさせていただくことができません。先ほど倉庫にも来られたそうなんです、いま、どちらにいらつしやるのかご存じありませんか？」

「どこに行つたかな。会つたらあなたを訪ねるよう伝えておこう。夜になつたからサラディンも手が空いただろう。彼もあなたに会えたら喜ぶと思う」

「だと良いのですが。グランディーナ殿はサラディン殿とお知り合ひでしたね。あの方が解放軍に参加してくださつてどれほど心強いことかわかりません。と

「ところで、今日はわたしからは特に報告すべきことはありませんが、何かご用ですか？」

「あなたは城塞の見取り図を持っているか？」

「ええ、もちろんです。これがなければどこにも行けませんからね」

「何人かで手分けして地図を写して城塞内に貼っておいてくれ。枚数は多い方がいいし、できるだけ早く済ませてくれ」

「それはまたなぜでしょう？」

「ランスロットがそこら中に貼っておけば皆が迷わなくてすむと言うんだ。地図の中に現在地を記すようにしておいてくれ」

「なるほど。それは名案ですね、ランスロット殿。」

早速、手配いたしました。ところで、明日からの補給はいかがいたしますか？ 海の方や天空の島となりますと自由がききませんし」

「天空の島ではじきに戦闘になる。必要最小限の物は持つていかせるから、あなたたちは待機だな」

「わかりました」

ヨハン・シャルマーズは補給の仕事が性に合うらしく初めて会った時よりも生き生きしていた。ホーライ王国時代も文官だったと言っていたので、事務的な仕

事に向いているのだろう。

逆にウォーレンは補給の仕事をしている時はあまり楽しそうではなかったが、彼は人前では感情を表にすることはしないのだ。

「君も決断するのが早いんだな」

「それで皆が助かるのなら早い方がいいだろう。私にはなぜいつまでも覚えられないのか不思議だがな」

「わたしに言わせれば君の方が早すぎるのさ。君はおおよそ迷子とは無縁そうだな」

「そうでもない」

「そういえば、君に借りた硬貨をずっと持ったままだった。わたしたちは助かったが、〈何でも屋〉のジャックには君からの呼び出しではなかったから、かなり残念がらせてしまったよ。ありがとう」

「どこにやったのかと思っていた」

彼女は無造作にポケットに硬貨を落とす。

「カリヤオに買い物に行った時に君が貸してくれただろう？ あの時に返し忘れたのさ。君にはまた彼に借りを作らせてしまったかな」

「私のことなど気にしなくていい。ジャックへの借りで救える命があるのならば、いくらでも作ればいもつともしばらく彼には会えそうにないがな」

その時、鐘が一回、高らかに鳴り響いた。あちらこちらの部屋が急に騒がしくなつて、騎士や剣士たち、それに狂戦士たちが慌てて廊下に飛び出してくる。彼らはグランディーナとランスロットを見かけると挨拶をして、身軽な格好のまま、階段を下りていった。

「あれが一の鐘というものかい？」

「そうだ。皆がばらばらになつたから連絡がしづらくなつた。エマーソンが倉庫にしまわれていた鐘を見つけてきて、鳴らしたらどうかと言ひ出して、鳴らす回数で誰を呼んでいるかわかるようにしようということになつた」

「それは彼らしい。だけど、寝てしまつた者たちには気の毒だつたようだな」

ランスロットが言うのは、何人かの者が皆に遅れて部屋を出てきたことを指していた。どうやら彼らは中庭に集まつたようだが、本来ならば、こんな時間に呼び出されることはないのだろう。

二人は二階のポリーシャルプレージとウォーレンとの部屋を訪ねた。グランディーナはアッシュにしたのと同じような指示を二人に出し、そのたびに名簿を確認したが、さらに細かく指示することはなかった。

それから再び三階に上がり、二人はトリスタン皇子

の部屋へ向かつた。

隣室がラウニイーとノルンだが、個室しかないと二人とも大層こぼしていたそうだ。アラムートの城塞は城ではない。大きすぎる司令官室以外は全体的に実用的な造りなのである。

部屋に近づいていくと賑やかな笑い声が廊下まで漏れてきた。

「トリスタン、入るぞ」

グランディーナが声をかけると話し声が止んだ。

扉を開けると、室内の五人がこちらを見ている。トリスタンとケインに、ラウニイーとノルン、予想どおりヨークレイフまでいた。

「ランスロットも一緒だつたのか」

「ご挨拶が遅くなつてしまい、申し訳ありません。

本日、サラディン殿のお供を果たして戻りました」

「堅苦しい挨拶は要らないよ。君たちが無事に帰還してくれて何よりだ」

トリスタンに肩をたたかれてランスロットは恐縮する。カノープスは歓迎するかもしれないが、皇子の気さくさは却つて気を遣いそうだ。

「トリスタン、アッシュがケインを補佐に欲しがっている。かまわないか？」



「アッシュ殿にはなぜ補佐がお要りなのですか？」  
 答えたのはケインだ。それでグランディーナは当人に向き直った。

「彼に騎士たちの教練を頼んでいるが、解放軍でもいちばん数の多い部隊だ。ケビンとチェスターだけでは庇いきれないところもある。補佐をつけるのに誰がいいかと訊ねたら、あなたを指名した」

「わたしはかまわないが、君はどうなんだ？」

ケインの表情からたちまち笑みが消える。

「なぜ、アッシュ殿はわたしを指名されたのですしょう？」

「彼に訊け。あなたが断れば、無理にとは言うまいが、その時はほかの者を探さなければならぬ。早く決めてくれ」

「わかりました。アッシュ殿の部屋は廊下のいちばん奥でしたかね？」

「奥から三番目だ。隣二室は空いている」

「グランディーナ殿、もしもわたしがアッシュ殿の補佐をお受けした場合は、部屋もそちらに移った方がよろしいでしょうか？」

「アッシュに訊け。私が指図することじゃない。後のことは任せるぞ」

「それでは失礼いたします」

ランスロットが一礼して急いで扉を閉めると、グランディーナはすでに階段の方に向かっている。

鐘が二回、三回が鳴ったのはじぎのことだ。二の鐘は槍騎士や女戦士たちを、三の鐘は魔法使いや人形使いたちを招集するが、どちらも場所は中庭と決まっている。廊下からも松明が何本も掲げられているのが見え、話し声も聞こえて賑やかだった。

治療部隊と魔獣部隊の鐘は鳴らされなかった。治療部隊は毎朝の簡易礼拝で伝え、魔獣部隊は先ほどの宴会で伝えられ、確認されたものと思われる。

「君は自室に帰るのか？」

「そうだ」

「さつき言っていた城塞の見取り図を貰いに行ってもいいかな？ 自力で部屋まで行けそうにない」

「かまわない」

四階には司令官室以外の居室がない。ほかの部屋はどれも大きな会議室である。ランスロットがそのことを知ったのも見取り図を貰ってからだ。こうして見るとそれほど複雑な構造ではないが、二階と三階の居室がどこも似たような造りで、廊下にこれといった目印もないのがわかりにくい原因ではないかと思われた。

「あなたとカノープスの部屋は二階だ。アッシュの隣の方が良かったか？」

「いいや、どうせ仮の住まいだ。どこでもかまわないよ。それにしてもこの部屋は大きいな。ジェミニ兄弟というのはそんなに巨漢だったのか？」

「半巨人と噂されるぐらいだ。身長も七バス以上はあった」

「カノープスよりも高いのか。それは、確かに言われるだけのことはある」

ジェミニ兄弟との戦いでは大勢の者が負傷させられた。アヴァロン島で大怪我を負って戦線を外れたユーゴススタンセとステイングモートンが復帰したというのに、それ以上の数の者がミナチトランやテグシガルパのロシユフォル教会での静養をやむなくされていくし、アッシュやアレックのようにアラムートの城塞内で静養する者も少なくない。なかには傷が癒えて戻ってきた者もいるが、全員が揃うのはまだ先のことだろうし、これからも途中で解放軍を去らなければならぬ者、去る者が出ることは避けられないのだ。ランスロットはふと、さきほどの宴会でマチルダが嘆いていたことを思い出した。

「彼女はアヴァロン島ではリスゴーさまたちを見舞っていたのに、今回はミナチトランにもテグシガルパにも来ないんですよ。『私が行っても手伝えることはない』なんて、リーダーが来てくれるだけで皆も励まされるでしょうに」

「グランディーナも少しは落ち着いて怪我を治したんじゃないのかな」

「彼女に限って、そんな殊勝なことは考えません」

「それは手厳しい」

「冗談事ではないんですわ。ランスロットさまからも仰ってください。この先、アラムートの城塞を離れてしまえば、そんな暇もなくなります」

「彼女には彼女なりの考えがあるのだろう。わたしがとやかく言えることではないよ」

「ですが、リーダーが怪我人を見舞わないなんて、どんな正当な理由があるとも思えませせんわ」

「グランディーナには訊いてみなかったのかい？」

「ですから、先ほども申し上げましたとおり、『私が行っても手伝えることはない』の一点張りです」

「わかったよ。わたしが言っても聞き入れられるような彼女でもないだろうが、後で訊いてみよう」

「お願いします」

「グランデイナーナ、マチルダから聞いたんだが」

「怪我人を見舞えという話か」

そう言った彼女の表情がさもうんざりと見えて、ランスロットは二人がこの会話を幾度もしてきたことに気がついた。

「マチルダに何を言われたのか知らないが、いまさら考えを変えるつもりはない」

「テグシガルパとミナチトランのロシユフオル教会に行くだけだ。グリフオンを飛ばせば、一日で往復できる距離じゃないか。なぜ行かないのか、理由だけでも聞かせてくれ」

「そのこともマチルダにさんざん言った。重傷者の治療をロシユフオル教会に任せきりにするわけにはいかないから、こちらからも何人か行かせるべきだと言いつ出したのはマチルダだ。ならば、私が行ったところで手伝うことなどなかるう」

「問題をすり替えないでくれ。マチルダが君に求めているのは解放軍のリーダーとして怪我人を見舞うことであつて、手伝うことじゃない」

「知っている。だが、私が行けば傷が早く治るのか。負傷者をいちいち見舞つていてはきりがない」

「君は解放軍のリーダーだ。君が立てた作戦で負傷した者たちを見舞つてやるのは当然じゃないのか」

グランデイナーナはそこでようやく身体全体をランスロットの方に向けた。その表情からは先ほどまでの、この議論を嫌がつている様子は見えなくなっている。

「私もそう思っていた。今回のアラムートの城塞攻めは皆に無理をさせた、ディアスポラの時もそうだ。

私の立てた策が別のものだったら、負傷者を減らすことができたかもしれない、死者を出さずに済んだかもしれない。だがいちいち振り返るにはゼテギネアは遠すぎる。だから後ろを見るのはやめた。生者も死者も責任は私が負う。どんな責めも受ける。怪我人は誰も見舞いに行かない」

「それは君のうぬぼれだ。わたしはわたしの意志でもって解放軍にいる、カノープスやギルバルドもそう。もしもその志が途中で絶えてしまつても悔いることなどないし、君に責任を押しつけたりはしない」

「だが、あなたのような意見は少数だ。だからマチルダは私に来てと言うし、命を失うようなことになつて初めて、人はなぜこんな戦いに参加したのだろうと思ひ、私のせいだと罵る。そんなことにいちいち耳を傾けるつもりはない」

「マチルダにはそう言わなかったのか？ 彼女はわからず屋じゃない。君がそのつもりでいるのなら、話せばわかってくれたらうに」

「彼女にはわからない」

そう言いながら、グランディーナはわずかに天井を仰いだ。

「彼女は戦士じゃないし、他人を切り捨てることができない。話はしたが納得してないだろう。だが彼女を治療部隊のリーダーから外すこともしない」

アラムートの城塞を落としたことで解放軍への志願者は増える一方だ。そのなかにはそもそも能力の足りない者や勘違いしている者も少なくなく、志願者というだけで受け入れられたのは遠い昔の話となっていた。魔獣使いはもとも旧ゼノビア王国以外には絶対数が少なかったのも志願者自体もほとんどいないそうだが、騎士や剣士、狂戦士などはこの国にも大勢いた。そのため、志願者も多く、ケビンやチェスターはしばらく試験ばかりしていたそうだ。僧侶や司祭の志願者ももちろんいるが試験するのはもっぱらモームの役割になっている。それらの判断に解放軍のリーダーとしてグランディーナが絡んでいるのは間違いない。

「わかった。マチルダにはわたしから話そう。この

件でこれ以上、君を煩わせないように伝えるよ」

「そんなことができるのか？」

「彼女とのつき合いはわたしの方が長い。うやむやにしても厄介だからな」

「頼む」

「それではわたしも休むことにするよ。お休み」

グランディーナは頷くと机に向かい、読みかけの書を物を開いた。

アラムートの城塞の司令官室には蔵書も少なくない。荒鷲の要塞を落としてからサラディンたちを待つあいだ、負った傷の静養も兼ねてか、彼女が外に出てくることは稀だったそうだ。グランディーナがその時に何をしていたのか正確に知る者はいないが、傷の治療に毎日、通っていたアイーシャによれば、彼女が蔵書を開いていたことは多く、それも行くたびに違う本だったという。

アイーシャが言うには、彼女はアヴァロン島にいた時も蔵書室に入り浸っているか、借りてきた本を読みふけていることも少なくなかったそうだ。

部屋に着くとカノープスはまだ戻っていないかった。糊のきいた敷布に横たわるなり、ランスロットは眠りに落ちていた。

朝方まで目も覚めなかったもので、起きたらカノープスがいた時には驚くというより、まだ朝ではないのかと勘違いしたほどだった。

「もう夜は明けたのか？」

「とつくな。六つ鐘が鳴ったら朝飯の合図で、十回鳴ったら、昨日見つけたカオスゲートに行く前の最後の打ち合わせだそうだ」

「朝食の鐘のことは知らなかった。誰に聞いたんだい、そんなこと？」

「城塞中の連中が知ってるさ。連絡手段に鐘を使うことにしたのはいいが、年がら年中鳴ってるから、うるさくてかなわねえって話だ」

「それは、仕方ないんじゃないかな」

ランスロットも立ち上がり、大きく伸びをした。熟睡したせいか疲れはすっかり癒されている。

「昨晩は早々にどこへ消えたんだ？」

「まあ、ちよつと野暮用でな」

「朝食の鐘が鳴る前に城塞の中を歩いてみないか。グランディーナに見取り図を貰ったんだ。この先はここでんびりする機会もなかなかないだろうからね」

「いいとも」

見取り図にはさすがに誰がどの部屋なのかまでは書き込まれていなかったが、城塞内を探索するには十分役に立った。

「また面子が増えたそうだな。俺はもう、全員の顔を覚えるのは諦めるぞ」

「そんなことを言つて。君ならば、わたしよりも早く覚えられるだろうに」

「魔獣部隊の連中は別だが、どうせ一度も話さないような奴らばかりさ。覚えられたら覚えるよ」

ランスロットは見取り図を片手に場所を確かめながら歩いていたが、先を行くカノープスは最初に一瞥したきり、どんどん歩いていつてしまう。

とうとう最後に、二人は中庭に下りた。

「君はどこを歩いたか、わかつているのか？」

「ここからこうだろう？ 聞いてたほどには面倒なところでもねえな」

「そんなことを言つてのけるのも君ぐらいのものだ。グランディーナはほとんどの者が迷つたと言つてたんだぞ」

「外に見える物に注意すればそんなこともないさ。その『ほとんど』に有翼人は入つてねえな。

飯時だったのか？」

カリナとチェンバレンⅡヒールシャーが振り返って挨拶をした。

「最近、戦闘もないし餌もいいで運動が欠かせないんすよ」

「エレボスが帰ってきたから、グリフォンたちの散歩も楽になるな」

「魔獣はどれぐらい増えたんだ？」

「大しては。ケルベロスが二頭と、最近入ったデルタって人形使いがストーンゴーレムを連れてきたぐらいですかね」

「ゴーレムは魔獣じゃねえぞ」

「リーダーが同じところに置いておけって言ったんすから」

「あいつも無茶苦茶言いやがる。魔獣とゴーレムを一緒のところに入れておくなんて、何、考えてるんだ」

「でもゴーレムっていうのは敵だと認識しないと動かないそうですよ。ほかにでかい部屋もありませんからね。魔獣どももいまじゃ慣れちまつておとなしいものでさあ」

カリナの言い分にカノープスはまだ納得してなさそうだったが、その話をそれ以上混ぜ返すのは止めることにしたらしかった。

「それより大将、あのケルベロス、誰が連れてきたと思います？」

「誰がつて、魔獣使いかホークマンに決まってるだろうが。それにしちゃあ、昨日のつらのなかに新顔はいなかったな」

「外れ！」

「ランスロット、おまえ、知ってるか？」

「わたしが魔獣のことで君より詳しいはずがないだろう。だいいちケルベロスがいるなんていままでも知らなかったんだから」

「カリナ、もったいぶらずに言え」

「大きい方がタラオスで小さい方がコイオスって名前なんすよ。ラウニーさんが餌い主だそうす」

「ええっ?！」

カリナとチェンバレンは笑っているが、ランスロットもカノープスも心底、驚いた。

魔獣使いや有翼人以外で魔獣を飼おうなどと考える者がいるとは二人とも思いも寄らなかつたからだ。ましてやケルベロスは三つの頭を持つ凶暴な魔獣である。もちろんその大きさはヘルハウンドの比ではない。いくらウインザルフ家が帝国一の名家とはいえ、その餌代も相当かかったはずで、そんなものを飼いたがるラ

ウニイーも奇抜ならば、そのことを許したのであろう。ヒカシュー大將軍の甘さも飛び抜けていた。しかも二頭もだ。

「マラノまで連れてきたのはよかつたけれど、ラウニイーさんがカストロ峡谷に逃げた時にマラノに置いてきたそうです。で、大將たちが出かけてるあいだに解放軍にめでたく合流つてことになったんすよ」

「よく、グランディーナが許したな」

「戦力じゃヘルハウンドとは比べ物にもならなかつたからな。あの二頭、ただの愛玩動物じゃないんだ」

「可愛いなんて理由でケルベロスを飼う馬鹿がいるもんか。半分は愛娘の護衛も兼ねてるつてわけか」

「聖騎士殿に護衛ですかあ？」

「うるせえ。飼い始めたころはラウニイーだつて聖騎士じゃなかつたんだろうが」

聞けば、アラムートの城塞戦では魔獣部隊とともに行動し、最後のジェミニ兄弟との戦いでもラウニイーともども活躍したそうだ。

解放軍のヘルハウンドは、ロギンスのベレボイアとチェンバレンのプロメニーしかない。ケルベロスが加入したならば、ますます出番はなくなってしまうに違いなかった。

「でも、あの二頭、女性の言うことしか聞きやがらないんで」

「ラウニイーとユーリアだろう？」

カリナもチェンバレンも頷いた。

「ギルバルドの奴、しょげてなかつたか？」

「団長は気にしてなさそうでしたけどね」

「魔獣使いの自尊心にかけてそのうちに手なずけようとするぞ。まあ、その前に俺が懐かせてやるけどな。おっと」

その時、高らかに鐘が六回、鳴り響いた。カリナたちは道具を片づけてグリフォンたちを宿舎に入れ、ランスロットとカノープスもそれを手伝った。

「あ、明日は俺、盛りつけの当番だ」

「魔獣の世話はロギンスとニコラスに頼めばいいだろう。俺も当番だしな」

「ああ？ なんだ、その、盛りつけ当番てのは？」

「いままで女連中だけがやってた食事当番すよ。リーダーが人数も増えたから男もやれつて言うんで、部隊のリーダー以外はやることになったんです。でもやってみると、これが案外難しいんですよ」

「おいおい。まさか、その当番てのには、俺たちも入ってるのか？」

「さあ？」

「わたしは構わないと思うが、君には嫌がる理由でもあるのか？」

「女子どもに混じって当番なんかやってられるか。

だいたい、おまえだって、グランディーナがどっか行こうっていうのに、当番だからって残れるのか？」

「それは、確かに難しいな」

「当たり前だ。誰が決めてるんだか知らねえが、俺たちは含めないよう言っておかないと」

「言い出しつべはグランディーナなんだし、彼女に言っておけばいいんじゃないのか？」

「そうだな。手っ取り早いさ」

それから四人が揃って食堂に向かうと、すでに大勢の者でごった返しているところだった。

「おいおい、鐘が鳴ったら朝飯じゃなかったのかよ？　こんなにいるなんて聞いてねえぞ」

「いまの解放軍には一〇〇人以上もいるのに、一度に食事できるわけじゃないでしょ。いくら大きいと言ったって、この食堂では一度に食事できるのはめいっばい詰めても八〇人がいいところだよ」

前掛けをしておたまを手にしたシルキィ・ギユンターが応じれば、

「そうよ。遅く来たカノープスたちが悪いのよ。順番は守ってよね」

とパン挟みを手にマンジエラ・エンツォも口をとがらす。

「それならそうと昨日、言えよ。俺たちは帰ってきたばかりなんだから、そんなこと知るわけないだろうが？」

「だったらカリナが教えてあげれば良かったじゃないの。グランディーナさまだって並んでるんだから、例外はなしよ」

最後には馬鈴薯のサラダを盛りつけるフィーナ・タビーにまで言われたので、カノープスはカリナを、次いでグランディーナを睨みつけたが、小さくなったホークマンの若者はともかく、解放軍のリーダーは気づかぬ風でサラディンと談笑している。

しかしランズロットが袖を引くまでもなく、彼は列の最後に並んで、強気な態度のかしまし三人娘たちやそのほかの女戦士たちを安堵させた。

「よく堪えたじゃないか」

「あいつらの言うことにも一理あると思ったから従ったまでさ。納得できなければ引き下がるかい」

「なるほど」



「ただ、いつそのこと、八〇人ずつ一斉に詰め込ん  
 だまつた方が話は速いだろうけどな」

カノープスの言うように食堂を見渡すとけっこう空  
 席が目立つ。二人、三人と集まるのはよいが、そうし  
 た者たちが座りたいように座っているものでどうして  
 も半端な席ができてしまうのだ。なかにはアツシユの  
 ように一人だろが隣の席が誰だろがまつたく気に  
 しない者もいないわけではなかったが、ほとんどの者  
 はそうはいかない。

「詰めろ」

「え？」

「おまえの隣の隣が空いているだろう。詰めろつて  
 言ってるんだよ」

「後から来たあなたに何でそんなこと言われなく  
 ちやいけないんですか？」

ランスロットが止める間もなかった。お盆を卓上  
 置いたカノープスは、いきなりその若い騎士にげんこ  
 つを喰らわした。

「ここは田舎の食堂でもなければ、学校でもねえし、  
 ましてやおまえのうちじゃねえ。さつさと食って、剣  
 でも振ってこい！」

若い騎士は抗議をしようと立ち上がったが、真紅の

髪と翼のバルタンを知らぬ者はごく少数だし、解放軍  
 内での彼の力を知る者も多い。あつという間に周りか  
 ら手が伸びて、騎士を抑えつけ、その場から引きずり  
 出していった。

「ずいぶん強引な追い出し方だな」

「おまえに言われる覚えはねえよ。だいたいおまえ  
 に限って、どうして薄ぼんやり見てやがつたんだ？」

「鐘は私が命じなければ鳴らされない。それと、そ  
 ろそろリーダーたちには別の場所で食事を取らそうか  
 考えていたところだ」

カノープスは若い騎士が座っていた席に腰を下ろし  
 たが、彼がなかなか移りたがらなかつたのも道理、そ  
 こにはたまたま、解放軍のリーダーが向かいに座つて  
 いたのであつた。

「考えなくていいから、とつとと実行に移せ。ほか  
 の奴らとはかく、おまえがあんな順番を真面目に守  
 るほど暇だとは思わなかつたぞ」

「たまには列に並んで皆の様子を見ているのもおも  
 しろい。こういう場では人の口は滑らかなになる」

「おまえがいることに気づかない奴なんかいるもん  
 か。そんなことよりちようどいい、俺とランスロット  
 を当番とやらに混ぜるんじゃねえぞ」

「もちろんそのつもりだ。担当には伝えてある」

「お、ちゃんとわかっているじゃねえの」

グランディーナとサラディンが同時に立ち上がった。

「じきに鐘を鳴らす。急げ」

「わかっているよ」

鐘が鳴らされたのは二人が食べ終わったところであった。ランスロットとカノープスは片づけもせず、会議室へ走るはめになり、後でかしまし娘たちに怒られた。

グランディーナは二人が来るのを待って話し始めた。行く先はわからぬが、すでに帝国軍の進軍が確認されている。解放軍も先へ進まねばならなかった。